


アフリカから世界に出会おう、体験しよう

【実践者】

氏名	遠藤いさみ	
学校名	栃木県立富屋特別支援学校	
対象学年	中学部2年	
担当教科等	全科	
実践年月日もしくは期間(時数)	令和7年9月30日(3時間)	

【実践概要】

1. 実践する教科・領域

総合的な学習の時間

2. 単元名と単元目標

- ① 単元名
「世界に出会おう」
- ② 単元目標
他国の人との交流を通して国際的な文化や生活に触れ、互いのよさや他国への興味関心をもつことができる。
- ③ 関連する学習指導要領上の目標
総合的な学習の時間に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさに気づき、積極的に社会に参加しようとする態度を養う。
(『中学校学習指導要領』第4章総合的な学習の時間第1目標)

3. 単元の評価基準

- ① 知識及び技能
世界には様々な生活や文化があることを知り、それぞれの良さに気付くことができる。
- ② 思考力、判断力、表現力等
多様な文化を多面的に捉え、世界の現状を知ることで、自分の考えを表現することができる。
- ③ 学びに向かう力、人間性等
多様な文化を知り、互いを尊重し認め合おうとする。

4. 単元設定の理由・単元の意義

① 単元設定の理由

他国の多様な文化や生活について知り、日本とウガンダの文化の違いや面白さに気付き、世界の国に興味関心を広げられることを目指し、本単元を設定した。

② 単元の意義

1・2時間目は、世界には様々な文化があり食事や生活など多様であることを知ることで他国への興味関心をもてるようにした。教師がウガンダで体験したことを写真や動画で伝えたり現地のもので用意して直接触ったりすることで日本とのつながりや他国のよさに気付けるようにした。

3時間目は、2国間の互いのよさを認めながら多様な文化を体験し、気付いたことや感じたことを伝えたり、積極的に国際交流を楽しんだりできるような学習を取り入れた。

③ 児童/生徒観

本学年は、知的障害をもつ生徒が在籍する中学部2年生、32名である。生徒たちの実態は異なるが日本以外の有名な国の名前や国旗を知っていたり、ALTとの学習でも意欲的にコミュニケーションを取ったりするなど積極的に学習に取り組む様子が見られる。しかし、海外に行くことが容易ではないことや生活経験の少なさから国際文化に触れる経験が少ないことが現状である。




④ 指導観

生徒一人一人の実態が異なるため、生徒たちにとって身近で興味関心をもつ写真を取り入れたり、「見る、聞く、嗅ぐ、触れる」など色々な感覚から他国の様子を感じたりできるように教材を工夫した。また、実際に研修員と直接関わる時間を設け、互いを認め合い楽しく国際交流ができるよう指導していきたい。

5. プログラム計画

回	テーマ ねらい	方法・内容	使用教材等
1	「海外の友達にうちわを作ろう」 ねらい:ウガンダについて知り、興味関心を持つことができる。	・国旗や写真を提示して、教師が訪れるウガンダ共和国について簡単に紹介をする。 ・各学級でうちわ作りを行う。日本らしいイラストを貼ったり、メッセージを書いたりする。	パワーポイント、うちわ、イラスト、折り紙、カラーペン
2	「ウガンダ(アフリカ)を知ろう」 ねらい:写真からウガンダについて知り、現地のもので実際に見たり触れたりする。	・うちわを渡した現地の子どもの反応を伝えたり写真を見せたりする。さらにウガンダの暮らしについて伝える。	パワーポイント、ウガンダシリング、アフリカ布、ラップ芯、折り紙、テープ、ボンド、ストロー、米
3 本時	「アフリカを感じよう、体験しよう」 ねらい:アフリカの生活や文化を体験し、現地から来た人々との国際交流を楽しむことができる。	・教師海外研修に参加した教師によるウガンダクイズでアフリカについて知る。 ・現地語講習や体験活動を通して国際交流を行う。	パワーポイント、籠、ポリタンク、アフリカ布、服、楽器、音源、プロジェクター

6. 本時の展開

時間	(3/3時間目)		
本時のねらい	他国の生活や文化を体験し、現地から来た人々との国際交流を楽しむことができる。		
過程 (時間)	教員の働きかけ・発問および学習 活動・指導形態	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (5分)	1. 前時の振り返り	・前時までの授業を受けていない生徒も理解できるように、教師が教師海外研修に参加したことやアフリカについて簡単に紹介する。	パワーポイント 世界地図
展開 (10分)	2. ウガンダクイズ 	・ウガンダクイズや写真を通して他国の食事や生活、文化について理解を深める。 ・サプライズで研修員に登場してもらい国際交流への期待感をもつ。 ・ウガンダ人研修員が実際に取り組む様子を見てから生徒数名が体験する。	パワーポイント
(15分)	3. あたまのせ、タンク運び体験、お土産コーナー 		籠、ポリタンク、アフリカ布、手作り楽器、音源
(15分)	4. ダンス交流 	・研修員からのウガンダやルワンダのダンスを紹介してもらおう。学年ごとにまとめ、研修員は各学年に1～2名ずつ分かれて一緒に踊る。	
まとめ (5分)	5. まとめ	・生徒数名に質問や感想を発表してもらい研修員に伝える。	

7. 評価規準に基づく本時の評価方法

- ・他国の生活や文化を知り、興味をもって体験や国際交流を行うことができたか。

8. 学校外との連携

- ・JICA 筑波 長期研修員(宇都宮大学在籍)、JICA 筑波職員

9. 生徒の学びの軌跡

【ウガンダを知ろう】

- ・カンパラ市内の様子を動画で見たときに、初めて見る光景になかなか画面を注視することがすくない生徒も興味をもって映像を見る姿が多く見られた。
- ・自動車やバイクがたくさんいる道路では、「道路の線がない。」「たくさんバイクが走っていて危ない。」などと日本との違いに気付く生徒がいた。
- ・あしながウガンダで披露してくれたダンスでは、自然と身体を揺らし他国の音楽に親しむことができた。

【アフリカを感じよう、体験しよう】

- ・研修員に自分から関わろうとする生徒が多くいた。手をつないでダンスをしたり、ハイタッチで称賛したり言葉がなくてもつながることができた。
- ・ダンス交流では、自分から研修員に近づいて手を繋いだり、自分の知っている英語で話し掛けたりする生徒の姿が見られた。
- ・現地語をすぐに覚えてありがとうと伝えることができた。「ムラコゼ」「ウェバレニヨ」と話し掛けて積極的に交流することができた。

10. 自己評価

① 成果が出た点

- ・アフリカについて分かる、分からないに関わらず、自分の知らないことに対しても興味をもって取り組んでみようという姿勢が見られ、生徒一人一人が様々な感覚から他国を感じる事ができたと思う。
- ・ウガンダやルワンダの現地語で「ウェバレ」、「ムラコゼ」など日本語でありがとうという言葉覚えて自分から研修員に伝え、国際交流ができていた。

② 苦勞した点

- ・学部全体での授業としたため約 100 名の実態差も幅広い生徒に対してスムーズに学習活動を展開させたり、少ない時間でも一人一人がアフリカの文化を感じたりできるように配慮したこと。

③ 改善点

- ・今後、国際理解の授業を行っていくうえで外部の方が授業に関わってくださるときには、ねらいや意図してほしいことをうまく伝えられるようにする。

④ 自由記述

- ・本単元の学習を通して、想像以上に生徒たちが他国に興味関心をもっており、他国に関する理解が深い生徒がいることが分かった。また、自然と自分の知っている英語を使いコミュニケーションを取ろうとする意欲的な姿も見られ生徒にとっても貴重な国際交流の機会となった。今後も、積極的に国際理解教育について学び、より多くの生徒が世界の国々の人と繋がりを感ずることができるよう機会を作っていきたい。

11. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組

- ・授業の様子を学校ホームページに掲載
- ・2024年度 JICA 筑波 教師海外研修参加教師や JICA 海外協力隊の経験のある教師にも授業実践の協力や教材提供を協力してもらった。

12. 自由記述

教師自身が体験してきたことの中から生徒にとって身近な事柄を写真や動画で伝えることでウガンダの文化を知ったり、他国の見たことのない光景に興味をもったり、驚いたりする姿が見られた。今回の授業で完結することなく、生徒が自国のよさを感じたり国際社会の一員として積極的に世界と関わったりすることを目指して今後も継続して授業を行っていきたい。

13. 参考資料

資料名	著者名等	出版元、URL 等
JICA 中部教師海外研修ガイドブック	NPO 法人 NIED・国際理解教育センター	独立行政法人国際協力機構中部センター

14. 本時で使用した資料

【授業で使用したパワーポイント】

